

インド思想史学会 第26回学術大会  
プログラムと発表要旨

開催日：2019年12月21日（土）

会 場： 京都大学 文学部校舎 2階第7講義室

京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科・文学部

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/about/access/>



連絡先：〒606-8501

京都市左京区吉田本町 京都大学人文科学研究所気付  
インド思想史学会事務局

TEL: 075-753-6949 (藤井) / 2460 (横地)

E-mail: hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~hit/>

本状は郵便での送付に先立ってメールでも会員の皆さまにお送りしています。本状を添付したメールが届いていない会員の方には、メールアドレスが未登録ですので登録をお願いします（本文にお名前を書いたメールを事務局 [hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp](mailto:hit@zinbun.kyoto-u.ac.jp) にお送りくださるだけで結構です）。

## インド思想史学会 第26回（2019年度）学術大会のご案内

インド思想史学会会長 井狩彌介

インド思想史学会第26回学術大会を下記の通り開催いたします。  
皆様、万障お繰り合わせの上ご参加ください。

### 記

開催日 2019年12月21日（土）

（※ 昨年とは場所が違いますのでご注意ください。）

会 場 京都大学 文学部校舎2階第7講義室

（理事会 12:00 – 12:40 京都大学文学部校舎2階第5演習室）

参加受付 12:30 から 京都大学 文学部校舎2階第7講義室前

参加費：1,000円 懇親会費：4,000円（学生2,000円）

### 研究発表者および発表題目

13:00 – 13:50 是松 宏明（東洋大学大学院文学研究科・博士後期課程）

「11世紀のジャイナ教空衣派における瞑想法の変遷」

13:50 – 14:40 竹崎 隆太郎（東京大学大学院人文社会系研究科・博士課程）

「大工仕事とソーマ濾過 —リグヴェーダにおける詩作過程と心臓—」

14:40 – 15:30 菊谷 竜太（京都大学白眉センター・特定准教授）

「インド密教における曼荼羅儀軌と注釈文献」

—— 休憩 ——

15:45 – 16:35 Madhu K. Parameswaran（京都大学大学院文学研究科・博士後期課程）

“On the Textual Transmission of Vāgbhaṭa’s Medical Works”

16:35 – 17:25 志田 泰盛（筑波大学・准教授）

「空華の分析可能性と思考可能性」

総会 17:25 – 17:45 引き続き、会場（第7講義室）で

懇親会 18:00 – 20:00 カフェレストラン「カンフォーラ」（京大正門横）にて

## 11 世紀のジャイナ教空衣派における瞑想法の変遷

是松宏明 (東洋大学大学院文学研究科 博士後期課程)

本発表ではジャイナ教空衣派シュバチャンドラ(Śubhacandra, 11 世紀頃)によって書かれたヨーガ文献 *Jñānārṇava*(以下, JA)における瞑想方法(dhyāna)について論じる。

JA 以前に瞑想について纏まった詳細な記述があるジャイナ教文献としてはウマースヴァーミン(Umāsvāmin, 2-5 世紀頃)の *Tattvārthasūtra* (白衣派では *Tattvārthādhigamasūtra*, 以下 TAS)がある。TAS は瞑想を「苦悩・残忍・美德・純粹(ārta, raudra, dharmya, śukla)」の四種類に大別している。そして美德の瞑想はジナの教説を考察の対象とする「教令の考察(ājñā-vicaya)」, 正法から生類が逃避してしまう不幸について考察する「惨禍の考察(apāya-vicaya)」, 業の異熟を考察の対象とする「異熟の考察(vipāka-vicaya)」, 世界の構造について考察する「構造の考察(samsthāna-vicaya)」の 4 種類に細分化される。

JA は TAS の瞑想の四分類を踏襲している。しかし JA では別の種類の美德の瞑想として、四大の観想によって身体を浄化する「物質的な対象に関わる瞑想(piṇḍasthadhyāna)」(JA34 章)と様々なマントラの文字の布置や念誦の行法を含む「言葉に関わる瞑想(padasthadhyāna)」(JA35 章), 一切智者の特性を観想する「形象に関わる瞑想(rūpasthadhyāna)」(JA36 章), 形象を持たない個我を観想する「形象を超えたものの瞑想(rūpātīṭasthadhyāna)」(JA37 章)が説かれる。これらの瞑想方法は TAS の瞑想方法と多くの点で異なっている。それは TAS の美德の瞑想の対象が教理的なものであったのに対し, JA は四大のイメージ喚起によって身体を浄化する観想法やマントラの布置などのタントラ的な修行方法を取り入れている点である。

タントラ思想はインド仏教のその後の修行体系に大きな影響を与えた。しかしジャイナ教は当時流行していたタントラ思想にどのような態度を取っていたのかまだ未解明の点が多い。ジャイナ教や仏教に代表される沙門の宗教は現象世界を不浄なものとして考える。それに対してタントラ思想には修行によって輪廻世界と身体の聖化を目指す志向性がある。その後の展開で、タントラ思想は仏教やヒンドゥー教諸派の修行体系に大きな影響を与えた。しかしジャイナ教は当時流行していたタントラ思想にどのような態度を取っていたのかまだ未解明の点が多い。JA の研究はこの問題を明らかにする上で重要であるといえる。

本発表では JA の瞑想の記述を中心的に論じることで、上述した問題の解決の糸口とすることを試みる。

## 大工仕事とソーマ濾過 ——リグヴェーダにおける詩作過程と心臓——

竹崎 隆太郎

RVにおける「*hrd-* 心臓」の諸用例のうちには、詩人が自らの詩の制作に言及する場面に出てくるものが一定数存在する。その文脈は二つに大別される。一つには、詩作に関して (1) RV 3.39.1, 1.67.4 などに代表される「心臓から／によって讃歌を大工仕事で作る( $\sqrt{takṣ}$ )」と、大工仕事に喩えて表現されるものが挙げられる。少なくともインドイラン祖語に遡るとされる(Schmitt *Dichtersprache* p.296f.)「言葉を  $\sqrt{takṣ}$  する」という表現は、RVにおいてヴァリアントも含め多くの用例が見出されるが、これに加えて「心臓」の関与が言及されている。もう一つには (2) RV 3.26.8 に代表される「心臓によって考えを濾す ( $\sqrt{pav}$ )」と表現されるものが挙げられる。RV 3.26.8 自体においては「ソーマ」とは明言されないものの、他の用例の考察からここでは詩作がソーマ濾過に喩えられている可能性が高いと考えられる。

このテーマは、GELDNER が当該 RV 詩節の訳註においてコメントを加える他は、DANDEKAR *Der vedische Mensch: Studien zur Selbstauffassung des Inders in Rg- und Atharvaveda*. Heidelberg 1938 の 59-61、DANDEKAR “Hṛd in the Veda” In : *Siddheshwar Varma Presentation Volume* 258-259 Hoshiarpur 1950 及び GONDA *Vision of the Vedic Poets* The Hague 1963 の特に 276-283 において扱われてきたが、本発表においては、全用例を訳註とともに提示した上で、当該讃歌及び関連讃歌内の文脈を可能な限り論じることにより、讃歌制作過程における心臓の機能に関するより精密な考察の提示を目指す。

## インド密教における曼荼羅儀軌と注釈文献

菊谷竜太（京都大学・白眉センター/文学研究科）

インド密教最晩期の学僧アバヤーカラグプタ（Abhayākara Gupta, ca.1050-1125）による大部の曼荼羅儀軌 *Vajrāvalī*（VĀ）は、同じくアバヤーカラの手になる曼荼羅觀想法 *Niṣpannayogāvalī*（NĀ）ならびにホーマ儀軌 *Jyotirmañjarī*（JM）とともに儀礼三部作を構成し、さらに密教百科事典的注釈書 *Āmnāyamañjarī*（ĀM）とも密接な関係をもつ。VĀ がディーパンカラバドラ Dīpaṅkarabhadra（ca.780-830）の「秘密集会曼荼羅儀軌『四百五十頌』*Sārdhatriśatikā*」から多くの影響を受けたものであることは先行研究によってすでに明らかにされているが、NĀ ないし JM そして ĀM にも複数の並行箇所を認めることができる。

『四百五十頌』は、ジュニャーナパーダ（Jñānapāda/Buddhaśrījñāna, ca.750-800）の失われた曼荼羅儀軌『二百五十頌』*Ñis brgya lña bcu pa* のいわば注釈書的な性格をもつと位置付けられ、ジュニャーナパーダの曼荼羅觀想法 *Samantabhadrasādhana* あるいは成就法 *Śrīherukasādhana* とも多くの並行箇所をもつ。VĀ に見出される『四百五十頌』該当箇所は Mori [2009 (1) : 15-16] の指摘によれば主要な部分でも計 36 箇所を数えうるが、実際にはさらに多い。こうした対応箇所のいくつかは JM・NĀ と同じくジュニャーナパーダにまで遡りうる。ラトナーカラシャーンティ（Ratnākaraśānti）の『吉祥秘密集会曼荼羅儀軌注』*\*Śrīguhyasamājamāṇḍalavidhiṭikā*（東北 1871）に加えヴィタパーダ（Vitapāda, \*Vaidyapāda）による『吉祥秘密集会曼荼羅成就法注』*\*Śrīguhyasamājamāṇḍalasādhanaṭikā*（東北 1873）という『四百五十頌』に対する二種類の注釈書がチベット訳で現存しており、このうちラトナーカラ注にも VĀ と多くの並行箇所を見出すことができる。

アバヤーカラの著作を扱ううえで注目されるのは、先行する多くの文献からの直接的引用と間接的引用に加えて、必要に応じて随時に改変がなされる点である。例えば、桜井 [1996 : 359 (n.22)] が指摘するようにラトナーカラ注との並行箇所において VĀ がアバヤーカラの思想的立場に沿うよう内容を書き換えているのはその一例と言えるが、このような事例は VĀ に引用される『秘密集会タントラ』あるいは『四百五十頌』も同様であり『秘密集会』からの引用部分はジュニャーナパーダに遡る。本発表では 1) ジュニャーナパーダの著作と『四百五十頌』との関係、2) 『四百五十頌』とヴィタパーダ・ラトナーカラ注との関係、3) 上記二つとアバヤーカラグプタの著作群という三つの段階を想定したうえで曼荼羅儀軌の成立過程とその注釈文献との相関関係について考察していきたい。

# On the Textual Transmission of Vāgbhaṭa's Medical Works

Madhu K Parameswaran

Doctoral Student, Department of Indological Studies, Kyoto University

In Indian classical medicine, a certain Vāgbhaṭa or Vāhaṭa has been ascribed with the authorship of two important medical classics, namely the *Aṣṭāṅgasaṅgraha* (AS) and the *Aṣṭāṅgahṛdayasaṃhitā* (AHS). Apparently, a third text called the *Madhyasaṃhitā* or *Madhyavāgbhaṭa* (MV) has also been ascribed along with the former two by two later commentators, Niścalakara and Śivadāsaśena as belonging to the same textual tradition. In the history of Indian classical medicine, these texts mark an important period of formalization and homogenization of its core medical theories.

Several questions on the identity, time period, nature of authorship and chronology of one or several authors of these texts have been raised and debated over the years by medical historians. However, none of these texts have been subjected to rigorous textual criticism till date and this has denied the historians an opportunity to place their arguments and judgements on a strong foundation of philological data. Currently a few important chapters of AS that deal with the core medical theories of *Āyurveda* are being critically edited by the present author.

Based on an initial survey of the available manuscript evidences and printed editions, this paper tries to address the questions of inter-textual relationships and chronology of AS, AHS and MV. On the question of inter-textual relationships, the present paper focuses on the interesting results of a textual comparison of the extant portions of MV with AS and AHS. On the question of chronology of these texts, this paper tries to address the sole differing voice of authors Hilgenberg and Kirfel, who argued that AHS, the most concise and versified work among the group as the earliest to be composed.

Key words: *Āyurveda*, Vāgbhaṭa, *Aṣṭāṅgasaṅgraha*, *Aṣṭāṅgahṛdayasaṃhitā*, *Madhyavāgbhaṭa*

# 空華の分析可能性と思考可能性

志田 泰盛（筑波大学）

非実在の喩例としての空華は、遅くとも後4世紀の文献には確認され、以降、千年以上に亘りインド古典の様々なジャンルの文献で使用され続けてきた。合理的な哲学対話中の喩例として使用される場合、立論者と想定対論者、そしてその作品の想定読者にとっても一定の共通理解が要請されていたはずの空華について、本発表では、代表的な先行研究を概観した上で、その語義分析の可能性と思考可能性という観点から、いくつかの哲学的文献の記述に基づいて検討する。

まず、語義分析の可能性として、*Tarkajvālā* (TJ) では、想定対論者が指摘する4種の語義分析全ての可能性が否定されている点に着目する。この点は、〈掌珍論〉において *Bhāviveka* が第6格限定解釈を支持するのと対照的であり、TJ 作者は、複合語の各構成語の直接表示対象を任意の格関係で連関させる通常の語義分析では、その意味を導出できないと考えていた可能性を示唆する。

一方で、間接表示解釈の可能性については、*Tantravārttika* における比喩論を検討する。クマールラが「元来の意味を直接表示できない語は、付託 (*adhyāropa*) を介したところで間接表示もできない」と主張し、比喩の本質を付託とする対論説を批判する中で、空華の間接表示論を展開する箇所を分析する。

次に、空華の思考可能性について、*Śloka-vārttikakāśikā* の刹那滅論の一節を検討する。ここでは、刹那滅論の基礎となる「実在性 (*sattva*) とは因果効力を発揮すること (*arthakriyākāritā*) である」という主張は、さらに「認識の対象でないものについては、その実在性に対する根拠がありえない (*avijñānaviśayasya sadbhāve pramāṇānupapattiḥ*)」という主張に基礎付けられている。スチャリタミシュラのこの議論から、インド古典版の〈思考可能性論法〉(Conceivability Argument) を読み取ることが可能である。さらに、空華と並列される他の喩例にも鑑みると、「論争当事者にとっては思考不可能だが、第三者にとっては〈見かけの思考可能性〉があるもの」の譬えとなっている可能性が指摘できる。

最後に、なぜ空華が非実在の喩例として使われ始め、その後、時代と学統の垣根を超えてその代表的地位を保ってきたのか、その背景について、兎の角の否定存在文の使用を正当化するクマールラの議論を通じて、兎の角と対比しながら考察を加える。

## 参考文献

AKAMATSU, Akihiko (赤松 明彦)

[2010] 「パースペクティブイズムにおける空華」、『インド論理学研究』1, pp. 41–58.

KANAZAWA, Atsushi (金沢 篤)

[1987] 「空華：ティミラ眼病（眼翳）との関わりで」、『佛教學』23, pp. (29)–(56).

KOBAYASHI, Hisayasu (小林 久泰)

[2013] “An Eye-disease Called *Timira*,” *Journal of Indian and Buddhist Studies* 61-3, pp. (20)–(26).